

中
2026

国

語

始める前に左の注意事項を読みなさい。

- 始めの合図があるまで開いてはいけません。
- 問題は全部で22ページあります。
- 答えはすべて解答用紙に書きなさい。
- 始まりの合図で、解答用紙に受験番号、氏名を書きなさい。
- 質問のあるときは静かに手をあげ先生の指示を待ちなさい。
- 終わりの合図があったら、ただちに筆記用具を置きなさい。

(第2回)

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

目が不自由な少女とわ（わたし）は、母と二人で暮らしていました。母は「とわの庭」と名づけた庭を育て、金木犀きんもくせいなど香り豊かな植物を植え、目に見えなくても四季の移ろいを感じられるよう工夫していました。とわは言葉や匂い、鳥の声に包まれて、充実した幼少期を過ごしました。しかし、やがて母の心身が不安定になり、生活はくずれていきました。食事も掃除もなくなり、ある日母は姿を消してしまいました。とわは孤独こどくと恐怖の中学生を送りましたが、それでも自分の人生をあきらめませんでした。さまざま人やものとの出会いの中で、盲導犬どうけん（補助犬）ジョイトと、新たな世界を切り拓ひらいていきました。本文は、そんなとわが、三十歳をむかえる日に、二十年前に母と訪れたことのある写真館に再び訪れた場面から始まります。

「実は以前、こちらで母と写真を撮とってもらったことがあるんです。今から、ちょうど二十年前になるのですが」
わたしは、なるべく※1父親のいる方を見るようにしながら言った。すると、

「覚えていますよ。あの時、いつしよにいらしたお嬢じょうさんなんですね」

感慨かんがい深ふかげに、父親が言う。それから、息子さんと呼んで、

「ちよつと、二十年前の大学ノート、持ってきて」

そう声をかけ、息子さんにノートを持って来させた。それから店の電話が鳴なったので、息子さんは電話に出て、やや込み入った会話をしている。父親は、ノートのページをめくりながら、穏おだやかな声で続けた。

「だいぶ寒くなってきた頃でしたね。もうお客さんは来ないかな、と思ってここでコーヒーを飲んでいたら、若

いお母さんが娘さんをおんぶして、『記念写真、撮ってもらえますか?』って来たんです。女の子はお母さんの背中で、泣いていました。 X がついたように泣く、って表現がありますけど、まさにそれで。お母さんは、昔の何巻きっていうのかな? スカーフを頭に被^{かぶ}っていて。写真の大きさと料金を説明したら、一番小さいのでもいいっておっしゃってね。おきれいな方でしたよ。背がすらつと高くて、色が白くて。でも、受け答え以外にほとんど喋^{しゃべ}らない方で、おとなしい印象がありました。① 娘さんがこんなに泣いているのに、おかしいな、って。それから、スタジオの椅子^{いす}に座^すってもらったんです。でも、娘さんが泣き止まなくてねえ。それで、いつも赤ちゃんなの目線^{めせん}をもらう時に使うおもちゃのトランペットとかを鳴^ならしたんです。そしたら、ますます泣いちゃって。参りましたよ」

「すみません」

わたしは当時のことを思い出して、お詫^わびを言う。あの時、わたしは聞きなれない音の中にいきなり放り出されたような気分になり、とにかく音が怖^{こわ}くて怖^{こわ}くて仕方がなかったのだ。

「(中略) いよいよシャッターを切るっていう段階になったら、お母さん、頭のスカーフを自分で外されました。本来ですと、スカート^{すそ}の裾^{すそ}とか足の位置とか、服のシワとかいろいろ細かく直すんですけどね、女の子がやると泣き止んだので、もうこのタイミングしかない、と思つて、わたし、急いでシャッターを切ったんです」

「つてことは、その時は、泣いていなかったんですか?」
わたしの記憶^{きおく}では、大泣きしていたはずだった。

「そうですねえ、泣いていない、つて言い切れるほど泣き止んでいたわけではなかったですけどね。でも、シャッターを切る瞬間^{しゅんかん}、お母さんが娘さんのおなかをくすぐったのかな、そしたら、娘さんがパッと笑顔になって、その笑顔を見て、思わずお母さんが女の子の方を見て微笑^{ほほえ}みました。ああ、いい写真が撮^とれてよかった、つて思い

ましたよ」

わたしはずっと、写真には泣き顔の自分が写っているのだと思っていた。

「そうですか。じゃあわたしも母も、笑っているんですか？」

② わたしは改めて確認したくなった。

「そうなんです。奇跡的に、そうになりましたね。そういうの、わたしはいつも、写真の神さまの粋な計らいだな、って思うようにしてるんです」

「あの日は、わたしの、十歳の誕生日だったんです」

様々な気持ちを込めて、わたしは言った。

(中略)

もしも、母が二十年前、わたしを写真館に連れ出さなかったら、わたしの誕生日はいまだにわからないままだったのかもしれない。当時、この写真館を営んでいた父親がシャッターを切っていなかったら、^③わたしは今も透明人間のまま、あの家に暮らしていたのかもしれない。

わからない。

わからないけれど、この人もまた、わたしの人生における大切な証人であることだけは確かな事実だ。

「ありがとうございます」

わたしは、心を込めてお礼を伝えた。

「いえいえ」

父親の声が、涙で湿っている。

「すみませんねえ、最近、やけに涙もろくって」

そう言い訳するように言いながら、父親がティッシュの箱から紙を抜き取っている。

わたしは、今日ここに来たもうひとつの目的を思い出した。

「それで今日は、また写真を撮っていただけないかと。今度は、この子とお願いしてもいいですか？」

ジョイの頭を撫でながらたずねると、

「^④そりやもう、喜んで」

父親が明るい声を出す。それから、大声で息子の名前を呼び、撮影の準備をするように伝えた。

(中略)

「親父が、音を出しても大丈夫ですかね？」

撮影の主導権を握る息子さんが^⑤遠慮がちに聞いてくるので、大丈夫です、とわたしは余裕の笑顔で答えた。

二十年後のわたしは、音に怯えて大泣きしたりはしない。^⑥音はもう、恐怖の対象ではなく、世界を染める絵の具になったのだ。

(中略)

「それでは撮りますよー。さん、にい、いち」

柔らかくて大きな音と共に、シャツターが切られる。

あれから、二十年が経ったのだ。

「わたし、三十歳になったんだって」

写真館からの帰り道、わたしはジョイに話しかけた。

時間の流れというものを感ずるのは、（A）、パリパリだったお煎餅せんべいがしけつたり、濡ぬれていた洗濯物せんたくものが乾かわいたり、とわの庭の植物の花が枯かれたり実がなったり、また芽が出たりする時だ。わたしは、自分の手で触さわったり、匂かいを嗅かいだり、味を確かめたり、音を聞いたりすることでしか、世界を把握はわくできない。確実に理解できる存在は自らの体の感覚で確認できたものがすべてで、だからわたしの世界は、星座のように点と点で結ばれている。わたしの人生は、見えない夜空に、少しづつ慣れ親おしんだ星座を増やすことだ。

すべてが手探りだから、わたしが実際に生きている世界は、小学生が夏休みの自由研究で作った※2ジオラマみたいにとても小さい。

だけど、そのジオラマの中にはジョイがいるし、とわの庭もある。※3黒歌鳥合唱団もいる。※4魔女まじよのマリさんや※5スズちゃんをはじめ、何人かの心を許せる友人もいる。図書館もある。物語もある。読みたい時に、好きなだけ本を読める自由もある。

それに、とわたしは思う。

これまでに読んだ物語に登場するすべての主人公だけでなく、ちよつとだけしか出番のない脇役わきやくも、動物も植物も、彼らはみんなみんな、わたしの人生を共に歩む仲間なのだ。たとえわたしのちっぽけな脳には限界があつてわたしが忘れてしまつていても、彼らはわたしという人生の船に乗り合わせた乗組員だ。

「幸せだねえ」

わたしは言った。

⑦「生きてるって、すごいことなんだねえ」

十歳、三十歳、と写真を撮つたから、次の記念写真は五十歳かな、とふと思った。けれどおそらく、その時はもう、ジョイはこの世界にいない。もしかすると、わたしだつてもういないかもしれない。それは、誰にもわか

らない。

(B)、今この時を謳歌しなくちゃ。

ジョイと散歩できることだって、奇跡のようにすばらしいことなのだ。本当は、一瞬一瞬が奇跡の連続なのだ。そのことに気づけたことが、三十歳の、一番のプレゼントだったかもしれない。

わたしは時々、^{※6}スイカズラが母さんなのか、母さんがスイカズラなのか、わからなくなる。もしかして、母さんなんて最初からいなくて、わたしは最初からひとりぼっちで、わたしはスイカズラの精に騙されて、長い夢を見ていただけなんじゃないかという気持ちになったりする。

それは、クリスマスまであと数日という、ある寒い冬の日のことだった。

ベッドに寝て休んでいると、ふと、何かの気配がして目が覚めた。わたしは、自分が夢を見ているのかと思った。

⑧ わたしの鼻が感じているのは、スイカズラの匂いだっただけからだ。

(中略)

母がすでに亡くなっていることを知らされたのは、それから数年後のことだった。郵便受けに、珍しく手紙が届いていた。すぐにスマートフォンアプリを使って調べると、差出人はオットさんだった。そこに、そのことが短い文章で記されていた。

オットさんは、母から預かっているものがあるという。それが、手紙と一緒に同封されていた。

母が、原稿用紙に書き写していたという「いずみ」という詩。その紙に触れたとたん、わたしは母の声を思い出した。母の柔らかい声が、わたしの胸で反響する。母が、わたしを愛してくれた証拠が、確かにここに残され

ている。そして、母もまた、わたしの祖父である父には愛されていた。

わたしは、母の文字が綴られてるだろう原稿用紙を両手で持ち上げ、その匂いをかぐ。かすかにスイカズラの香りがしたように感じたのは、わたしだけの錯覚だろうか。

すべてはここから始まって、そしてまた戻ってきた。わたしの人生の端つこと端つこが結ばれて、丸い形のリースになる。その、いびつだけれど美しい円の中に、わたしと、そして母さんの人生がある。

母を抱きしめたい。わたしのこの両手で、優しく抱きしめてあげたい。

(C)、それはもう叫わな。あの日、きつと母さんはわたしに別れを告げに来たのだろう。冬の日のスイカズラの香りは、母の魂の匂いだったに違いない。

その香りを、わたしはしっかりと自分の胸に吸い込んだ。だから母は、今もわたしのこの体の中で生きている。

わたしは、心の中で「いずみ」を読む。

母がわたしに読んでくれた詩を、今度はわたしが母に読んで聞かせる。

そして、あの詩は最後、こう結ばれるのだ。

だいじょうぶ、泉はけっしてかれないから。

あんしんして、わたしのそばで、ぐっすりおやすみ。

思い出した。紙に書いてある母の文字は読めないけれど、母の声は、この胸に生きている。

わたしは、この詩を口にしていた時の母の心情を、ようやく理解した。

母は、わたしを愛していたのだ。

わたしが母を愛したように、母もわたしを愛してくれていた。途中からそれが横道にそれただけで、最初は母も、わたしを純粹じゆんすいに愛していた。

そのことにやつと気づいたわたしの肩を、どこからか現れたスイカズラの香りが、そつと優しく包み込んだ。

わたしには、まだまだやりたいことがたくさんある。

人生の新しい扉とびらは、開かれたばかりだ。

飛行機に乗って空を飛び、風に揺れる風圧ゆづをこの体で感じたい。

※⁷ ハーレーダビッドソンにだつて、乗ってみたい。自分で運転するのは難しくても、誰かの背中にしがみついて、未来へと風を切ることは可能だ。

そしていつか、馬にも乗りたい。

もしかすると馬なら、目が見えないわたしでも、乗せてくれるかもしれない。誰かといつしよでもいい。少しずつ速度をあげて、草原の中を駆かけてみたい。一瞬でいいから、馬の背中にまたがつて、青い空を思いつきりはばたいてみたい。

それが、わたしの夢。

⑩ 確かにわたしは目が見えないけれど、世界が美しいと感じることはできる。この世界には、まだまだ美しいものがたくさん息を潜ひそめている。だからわたしは、そのひとつひとつをこの小さな手のひらにとつて、慈いづみたいたいのだ。そのために生まれたのだから。⑪ この体が生きている限り、夜空には、わたしだけの星座が、生まれ続ける。

(小川糸『とわの庭』より)

(注) ※1 父親 写真館の店員。

※2 ジオラマ 実際の風景や建物、場面などを、縮小して立体的に再現した模型。

※3 黒歌鳥合唱団 庭にいるクロウタドリという鳥たちの鳴き声のこと。とわは朝、この鳥たちの鳴き声で起きていた。

※4 魔女のマリさん 近所の住人。ピアニスト。

※5 スズちゃん 児童養護施設^{しせつ}で出会った友人。

※6 スイカズラ 春から初夏にかけて、白や黄色の香りのよい花を咲かせる植物。

※7 ハーレーダビッドソン アメリカのオートバイ(バイク)メーカーの名前。

問一 には、次の慣用句の空らんと同じ漢字が一字入る。当てはまる漢字を答えなさい。

顔から が出る (非常に恥ずかしい思いをした時に、顔が真っ赤になる様子のこと)

問二 — 部①「娘さんがこんなに泣いているのに、おかしいな、って」とあるが、なぜ「父親」は「おかしい」と思ったのか。その理由としてもっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 母だけではどうにもならない状況で、助けを求めないことを不思議に思ったから。

イ 血がながっている親子なのに、性格がまったく異なっているようだったから。

ウ 泣きやまない娘をあやすためにも、もっと話しかけるのが普通だと思ったから。

エ 娘が泣きやまない時は、母として写真を撮ることを中止するべきだと思ったから。

問三 — 部②「わたしは改めて確認したくなった」のは、なぜか。理由としてもつともふさわしいものを次か

ら選び、記号で答えなさい。

ア 記憶とは異なり、写真の中のわたしが笑っていることが嬉しかったから。

イ 泣き顔であった記憶は、母との大切な思い出のため、変えたくなかったから。

ウ わたしの笑顔が、本当に神様の粋な計らいなのか、疑問に思ったから。

エ 母とわたしが二人とも笑顔であることなど、あり得ないと思ったから。

問四 — 部③「わたしは今も透明人間のまま、あの家に暮らしていたのかもしれない」とあるが、この場面に

おける「透明人間」はどのような意味か。もつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 透き通った心を持つ存在

イ 姿・形が目に見えない存在

ウ 自由に好きなことをする存在

エ 誰からも認識されない存在

問五 — 部④「そりやもう、喜んで」とあるが、この時の父親の心情としてもっともふさわしいものを次から

選び、記号で答えなさい。

- ア 重たい空気感に耐えきれなくなっていたため、明るい話題で救われた気持ち。
- イ 二十年前の話をしたうえで、再度写真の撮影を頼まれ、心から嬉しい気持ち。
- ウ 来客が少ない中、ついでに写真を撮ってくれることを聞いて、安心している。
- エ 自分が「わたし」の人生にとって大切な証人であることに責任を感じている。

問六 — 部⑤「遠慮がち」・⑨「いびつ」の語の意味としてもっともふさわしいものを次からそれぞれ選び、記

号で答えなさい。

⑤「遠慮がち」

- ア 我慢できずにすぐ行動するさま
- イ 相手の要求や申し出を受け入れないさま
- ウ 物事をよく考え、軽はずみな行動をしないさま
- エ 言葉や態度が控えめであるさま

⑨「いびつ」

- ア 形や状態がゆがんで正しくないさま
- イ 華やかではないが人目を引くさま
- ウ むだがなく、理想的に整ったさま
- エ 大きくてバランスがとれているさま

問七 — 部⑥ 「音はもう、恐怖の対象ではなく、世界を染める絵の具になったのだ」について、「世界を染める

絵の具」とはどのような意味か。もっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア とわにとつて世界を知る唯一の方法

イ 世界を認識するための一つの手段

ウ 白黒の過去に色を与えてくれるもの

エ 二十年前の思い出を塗りかえるもの

問八 (A) (C) に入る接続語として、もっともふさわしいものをそれぞれ次から選び、記号で答えなさい。

ア また イ けれど ウ そして エ だから オ このように カ たとえば

問九 — 部⑦ 「生きているって、すごいことなんだねえ」の説明として、もっともふさわしいものを次から選び、

記号で答えなさい。

ア 自分の人生におけるすべての出会い、瞬間が奇跡の連続だということ。

イ 生きづらい世の中では、生きているだけで素晴らしいことだということ。

ウ 辛い過去を乗り越えて、今も命があることは当たり前ではないということ。

エ 幸せを感じながら生きることが誰にでも与えられるべき権利だということ。

問十 — 部⑧ 「わたしの鼻が感じているのは、スイカズラの匂いだったからだ」とあるが、この時感じた匂い

は何だったと「わたし」は考えているか。解答らんに合うように、本文中から三字でぬき出しなさい。

問十一 — 部⑩「確かにわたしは目が見えないけれど、世界が美しいと感じることはできる」とあるが、「わたし」はどのように世界を把握するのか。解答らんに合う形で、本文中から三十五字以内で探し、はじめとおわりの五字をそれぞれ書きなさい。ただし、句読点も一字とします。

(三十五字以内) こと

問十二 — 部⑪「この体が生きている限り、夜空には、わたしだけの星座が、生まれ続ける」の説明として、もっともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 過去の星座は忘れ、自分だけにしか感じることでできない、本当に価値のある星座を見つける旅に出るということ。

イ これから先、今まで見るができなかった母との思い出を感じ取るためにたくさん努力を続けていくということ。

ウ これから先、今まで増やしてきた自分の中の星座たちを線で結び形にしていくことがわたしの人生だということ。

エ これからも、目が見えない中で、自らの体の感覚で確認できたものによって美しい世界を感じていくということ。

問十三 本文を読んだA、Dの四人の中学生が、話し合っています。次の発言の中で、文章の内容の読み取りが、あきらかに間違っているものを一つ選び、記号で答えなさい。

生徒A とわは、お母さんとの思い出を正確に把握はつかするためだけに、写真館へ行ったので、お母さんとの「過去」をいつまでも大切にしているのだと思います。

生徒B 私は、最後の部分でとわ自身の夢について語っているところから、過去だけでなく「未来」への希望もしっかりと持っていることが印象に残りました。

生徒C なるほど。私は、未来に希望を持ちながらも、未来が不確実であることを受け入れて、「現在」を精いっぱい楽しもうとするのが素敵だと思います。

生徒D とわは「過去」「現在」「未来」すべての人生の時間を大切にしようとしているということですね。そういった前向きな姿に、私たちは励まされるのだと思います。

二 次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。

じよろ 小林純一

① じよろ、という字はね、

如^{じよ}雨^う露^ろと書くんだよ、

雨降る如^{ごと}く、

露^{つゆ}おく如^{ごと}く……

ね、

水をまくのじゃなく、

雨を降らすように、

やわらかく、やわらかく……

ヨシコも やつてごらん。

そう、そう、

しゃわ しゃわ しゃわ

しゃわ しゃわ しゃわ

ほら、

② 葉つぱが 声をあげているだろう。

草が からだをくねらせて いるだろう、
花びらが かがや輝きだしたろう、
うれしいのさ、喜んでいるのさ。

じよろで 雨を降らせているとき、
人は

天の神さまになる……

え 天使のほうか いい？

そう、子どもだったら 天使になる……

やさしい 気持ちになつて、

やさしい 顔になつて……

おぼえておおき、

じよろは 如雨露

水をまくんじゃないんだよ、

雨を X、

露を うるおすんだよ。

③ しゃわ しゃわ しゃわ しゃわ
しゃわ しゃわ しゃわ

やわらかく、やわらかく。

問一 この詩の形式を次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 口語定型詩
- イ 口語自由詩
- ウ 文語定型詩
- エ 文語自由詩

問二 — 部①「じよろ」はこの詩の中でどのような役割を持ちますか。もつともふさわしいものを次から選び、

記号で答えなさい。

- ア 雨が降ることを祈るための道具。
- イ 神さまを呼び出すための道具。
- ウ 子どもが土をほるための道具。
- エ 植物に水を与えるための道具。

問三 — 部②「葉っぱが 声をあげているだろう」とありますが、ここで用いられている表現のしかたの説明

として、もつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 雨に降られた葉っぱが悲しんでいる様子を、反復法を用いて表現している。

イ 水を受けた葉っぱが満足している様子を、擬態語を用いて表現している。

ウ 水を与えられた葉っぱが喜んでいる様子を、擬人法を用いて表現している。

エ 水を浴びた葉っぱがやわらかくなる様子を、比喩（たとえ）を用いて表現している。

問四 X に入る語としてもつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア そそぐんだよ イ 楽しむんだよ

ウ さけるんだよ エ やませるんだよ

問五 — 部③「しゃわ しゃわ しゃわ」とありますが、これはこの詩ではどのような様子を表していますか。

もつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 草や花に水をあげた後に体を洗う様子。

イ 雨が降って草や花がぬれている様子。

ウ 草や花に水を優しくかけている様子。

エ 草や花が受けた水を吸収している様子。

問六

この詩についての感想を生徒たちが話し合いました。次の生徒たちのはなしの中で、間違っていることを言っている生徒の発言としてもつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

生徒 A この詩を読むと、如雨露は植物に水をあげるだけではなくて、水をあげることで命を育む役割を持っているように思えるな。

生徒 B つまり、植物への水やりは、毎日行うことが重要であることと、命を育む行動であることの二つの意味が込められているね。

生徒 C ということは、水やりという身近な行動を通して、命の尊さと人のやさしさを伝えようとしていることが分かるね。

生徒 D この詩は大人が子どもに語りかける形式だけど、子どもにとっては自然を愛したり大切に思いやったりする心を育むきっかけになるよね。

三

次の和歌について、後の問いに答えなさい。

A 奥山に もみぢ踏み分け 鳴く鹿の 声聞く時ぞ (X) は悲しき

B みかきもり *衛士えじのたく (Y) の 夜はもえ 昼は消えつつ ものをこそ思へ

*衛士えじ…交替こうたいで様々な国から召集される兵士

問一 Aの和歌の (X) に入る季節としてもつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 春 イ 夏 ウ 秋 エ 冬

問二 Bの和歌の (Y) に入る語としてもつともふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 葉 イ 戸 ウ 気 エ 火

五

次の——部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① ガイトウが多く並び、夜の道を明るく照らす。
- ② 彼の間違った行動は多くの人からヒハンをあびた。
- ③ 子がスコやかに育つことが親の願いだ。
- ④ 感染症のため数日間自宅でタイキする。
- ⑤ 商品の売れ行きが良く、ザイコがなくなってしまった。

六

次の——部の漢字の読みを答えなさい。

- ① 貧富の差が激しいことは深刻な社会問題だ。
- ② 旅行先で郷土料理をいただく。
- ③ 新居で必要となる雑貨を買いに行く。
- ④ スポーツマンシップに則って試合を行う。
- ⑤ 米俵が山のように積み重ねられている。

